

「胡化」、「華化」と国際化

—唐代の対外文化交流の成果に対するいくつかの新たな考え方—

李 浩

(訳 丸井 憲)

[摘要] 唐代における対外文化交流の過程において、厳密な意味での「胡化」(訳者注:西域化)が出現したことはなく、外来文化の「華化」(訳者注:中国化)こそが完全な事実と言え、また唯一の論争解決への道である。かつて「胡化」や「華化」を強調した人々は、いわば同じ立場から出た表と裏の両面であり、それぞれ極度の否定と肯定の態度をもって中国と西域との交流の重要な成果を誇張しようとしたものである。しかしながら、唐代における中国と外国との交流を正確に概括すれば、それは世界性ではなく国際化であって、こうした立場から唐代の中国と西域の交流を見直すことで、最も深く考えさせられる問題は、いわゆる「胡化」でもまた「華化」でもなく、むしろ国際化と多様化であって、このうちに現れた文化的に寛容で相互に裨益し合う宗教的理性は、紛争の絶えない現代国際社会に対して、いくばくかの智慧や啓示をもたらさうかもしれない。

隋唐期の中国は外国との往来が頻繁であり、国際交流も盛んであったことは、文献資料や出土文物、考古学の成果などさまざまな面から十分な証明を得られ、これに疑問の余地はない。しかしどの程度において、もしくはどのような意味から、こうした世界文化史上まれに見る現象を見積もり評価するかによって、異なる見方が生まれ、また多くの論争を生んできた。この点についてはすでに多くの論著があるので、ここでは贅言を控えたい。

友人である葛承雍教授は『唐朝の世界性を論ず』というテーマで^①、唐代における対外交流について詳しく論述された。葛教授は「世界性」ということばを使いながら、①外国人の入国居住を許可し、②その参政や仕官を許可し、③外国人の將軍を重用して軍を統率させ、④法律上の立場を平等とし、⑤通商貿易を保護し、⑥異民族間の婚姻を許し、⑦文化を開放・融合し、⑧衣食住が混ざり合うに任せ、⑨外国人僧侶の布教活動を許可し、⑩留学者らの集会を許可したことなど、十の方面から詳しく論じられた。出土文物あり文献資料あり、図表も多く、根拠も確かで、網羅的かつボリュームのある論文であった。しかし葛氏がよく使われたキーワードの「世界性」という言葉については、なお検討すべき余地がある。

まず、「万国来朝」や「万国衣冠」といった類いの美辞麗句はさておき、史実に照らせば、『唐

六典』卷四の記載によると⁽²⁾、盛唐期において唐朝とつねに往来していた国は70カ国あまりあるが、これらの国のうち最も主たるもので関係が最も密であったものは、こんにちのアジア諸国に属しており、その文化が交流のなかで根を下ろし、後世にまで及んだのもまた、いわゆる「漢文化圏」の国々であった。よって葛氏や普通の学者が言う「世界性」とは実は「アジア性」ということであるから、本稿での議論においては「世界性」という用語はあえて使わず、「国際性」、「国際化」という用語を使い、名実相い伴う言葉を求める気持ちを暗に込めた。

次に、著名な歴史家である梁啓超はかつて、「中国之中国」、「亞洲之中国」、「世界之中国」という三段階説によって中国の古代史、中世史および近代史を概括したが、梁氏のいわゆる中世史とは秦の統一から清の乾隆末年までを指す。漢と唐とが中心であり、これらは中国の民族とアジアの各民族との交渉が頻繁であり、競争が最も熾烈であった時代であったが、基本的にアジア以外の民族からの刺激は受けていなかったため、内部にさほど大きな変動はなかったと梁氏は見なしていた⁽³⁾。よって本稿で「アジア性」を強調し、慎重にも「国際化」という言葉を用いるのは、この近代歴史学の開祖に対する真摯な敬意を込めてのことでもある。

唐朝期における対外交流を論じた著述には二つの傾向があり、その一つは実証と列挙の方法によって、多くの外来文明が唐代に伝えられたことを説明するもので、いま一つの傾向は唐朝の文化が四方に遠く放射し影響したことを詳しく説明するものである。両方とも事実の根拠があり、疑いの余地はない。中国や東洋の学者らに多くの著作があるばかりでなく、西洋の中国学者にも詳しい論述がある。たとえばシェイファーの『唐代の外来文明』は前者に重点を置いた集大成的な仕事である⁽⁴⁾。後者ではフェアバンクとライシャワーの共著である『中国：伝統と変革』があり、これにも優れた論述が見える。いわく「唐朝は当時最大の帝国として、多くの近隣民族によって熱心に模倣された。人類でこのように高い比率の人々が中国を注視したのは、これを当時屈指の軍事大国と見たからだけではなく、政治や文化の模範として見ていたからでもあって、このようなことは唐以前にはなかったことであり、また唐以後にも二度と起こらなかった」と⁽⁵⁾。こうした讚美は中国人の自尊心を大変満足させるものではあるが、国際化とは実際には単なる外来文化の輸入だけではなく、さらには中国文化の征服史でもないものであり、そのいずれか一方を強調することは、交流史上の豊かで大事ないくつかの側面を見失わせるものであり、これは一種の身勝手な主観の押しつけであって、歴史の真相を慎重に復元しようとするものではない。真の国際化とはもっと多面的、多元的であるはずである。

本稿はまさしくこのような考え方に基づいて論を展開するものだ。「胡化」、「華化」といったことについては、馮承鈞氏の『唐代華化蕃胡考』、桑原隲蔵氏の「隋唐時代に支那に來往した西域人に就いて」（訳者注：『内藤博士還暦祝賀支那學論叢』所収）、常任俠『糸綯之路〔シルクロード〕と西域文化芸術』、向達氏の『唐代長安と西域文明』第四節および第八節に専門的な論述があり、資料も豊富である。ここ数十年來、新たな出土文献の増加にともない、中国大陸、香港・台湾、日本でさらに多くの新たな研究成果が現れた。よって本稿では、向達氏ら先達の資料の補足や細密化ではなく、論述の視点を変え、論述の重点を移すことに重きを置くことになるので、これらの新たな研究成果を詳しく紹介するつもりはない。

唐代において、外来文化が中国に影響をもたらしたことは、さまざまな角度から検証することができる。まずは交流を持った国の数の多さであって、『唐六典』巻四「尚書礼部・主客郎中」には「凡そ四蕃の国、朝貢を経て已後、自ら相ひ誅絶し、及び罪有りて滅せ見れし者、蓋し三百余国。今在る所の者、七十余蕃有り。其の朝貢の儀、享燕の数、高下の等、往来の命、皆な鴻臚〔外国の賓客の応接に当たる官吏〕の職に載せらる。」⁽⁶⁾ という記載があり、原文の下にはさらに「四蕃の国」の名称を具体的に注記している。貞観の末には毎年使者が朝貢し、「四夷の大小君長、争ひて使人を遣はして献見し、道路絶へず。元正毎に朝賀するもの、常に百千人を数ふ」と記されている⁽⁷⁾。

次には内地への転居と移民の増加である。たとえば貞観四年、十五万の突厥人らが南下して帰順し、長安に居留すること一万世帯近くのにぼった⁽⁸⁾。天授元年には西突厥の可汗が残兵六、七万人を率いて内地に移り住んだ。総章二年、高麗人二万八千二百戸が江淮以南および并州、涼州の地に遷って定住した。開元十九年に、朝廷は五万余の異民族が中原に移り住むのを許可した。おおよその統計によれば、北方の国外の部族が唐朝に移民してきたのは少なくとも二百万人以上にのぼるといふ⁽⁹⁾。このうち長安およびその付近に居住したものでは、たとえば咸亨期ではペルシャの王子・卑路斯が亡国の憂き目に遭い、援助を求めて入唐し、随行した王室の成員、貴族の子弟らは数千人をかぞえ、長安に流寓した。またホータン王国の王・尉遲勝は五千人を率いて唐王朝が叛乱を平定するのを助け、のちみな長安に居留した。徳宗の貞元三年には朝廷が、長安に四十年もの長きにわたって居留し、かつ妻子あり田畑を持つ朝貢使節に対して調査を行った結果、その数実に四千人にもものぼることがわかった⁽¹⁰⁾。

第三に、商業貿易、医薬、音楽、舞踏、絵画などに従事する専門家らが大量に流入していた：

王建「涼州行」：「城頭の山鶏角角を鳴らし／洛陽の家家胡楽を学ぶ」⁽¹¹⁾

元稹「法曲」：「胡騎の烟塵を起こしてより／毛毳腥膻として咸・洛に満つ。女は胡婦と為りて胡妝を学び／伎は胡音を進めて胡楽に務む。……胡音、胡騎および胡妝／五十年来竟に紛泊たり」⁽¹²⁾

『旧唐書』巻四五「輿服志」：「開元来……太常楽、胡曲を尚び、貴人の御饌には盡く胡食を供し、士女は皆な竟に胡服を衣る。故に范陽に羯胡の乱有り。好尚に兆すこと遠かりき。」⁽¹³⁾

社会に外来の風俗習慣が増えたことは事実としても、安史の乱の勃発を外来文化の流入と関係づけるのは、伝統的な思想を重んずる考え方による。

陳鴻の小説『東城老父伝』は、老父の口を借りて「上皇の北臣穹廬、東臣鷄林、南臣滇池、西臣昆夷、三歳に一たび来たり会す。朝覲の礼容、臨照〔訳者注：上から下を見る意〕の恩沢、衣の錦絮、飼の酒食、事を展べて去らしめ、都中に外国の賓を留むること無かれ。今北胡、京師と雑処し、妻を娶り子を生む。長安中の少年、胡心を有せり。吾子、首飾・靴服の制を視れば、尙と同じからず。物妖に非ざるを得んや？」と述べている。

当時の正統派知識人が心配したのは単に胡服、胡食、胡楽、胡舞のことでなく、弥漫する

「胡風」（訳者注：西域的な風俗習慣）や「胡氣」（訳者注：西域的な雰囲気）が形成するところの「胡化」であり、ここにいう「胡心」（訳者注：西域風の考え方・感じ方）なのであった。こうした見方をした人は当時や後世でも少数ではなく、かなり代表的なものであった。このような観点によるならば、われわれが称賛する唐代の外来文化の成果はみな、法廷で判決を下された犯罪や罪証のようなものになってしまう。よって「胡化」という言葉を用いるとき、それは当時の人々にすでに「胡心」が生じていたことを指し、ならば盛唐期の安史の乱、中唐期の藩鎮割拠や晩唐期の王朝滅亡はみなこれと関係がある、とするものである。こうした見方は明らかに短絡的かつ表面的であり、社会の発展における諸々の複雑な連環を断ち切って、端と端とを一本の線で直につないでしまうようなものである。

史実に照らせば、統計によると、貞観十三年の全国の戸籍数は3,041,871戸、人口は12,351,681人。天宝十三載における戸籍数は9,187,548戸、人口は52,881,280人⁽¹⁴⁾。京城に所在する京兆府で見れば、貞観期の戸数は207,650戸、開元期の戸数は362,909戸、天宝期の戸数は362,821戸である⁽¹⁵⁾。詩文中に述べられた京城の人口には、戸籍のある住民と、「浮寄流寓し、勝^あげて計^{かぞ}ふ可からざる」者⁽¹⁶⁾とが含まれていた。たとえば、

岑参「秋夜 笛を聞く」：長安城中 百万の家／知らず 何人の夜笛を吹くや⁽¹⁷⁾

韓愈「門を出づ」：長安 百万の家／門を出づるも^い之く所無し⁽¹⁸⁾

韓愈「今年の権停の選挙状を論ず」：今京師の人、蓄^たに百万のみならず⁽¹⁹⁾

賈島「山を望む」：長安 百万の家／家家屏を張ること新たなり⁽²⁰⁾

これらの史料によって分かれるとおり、流入人口であれ京城に居住して朝貢、商売、布教を行った人口であれ、彼らをもたらした外来の物質文明が、唐代文化の総量に占める割合は実際には非常に小さなものだったし、本土固有の主たる文化や権威ある文化に拮抗できるはずもなく、よって社会や政治にそれほど大きな衝撃をもたらすことはありえず、さらには儒教の道德や倫理を基礎とする国家の根幹を揺るがすこともなかった。我々が飽くこともなく唐代の外来文化の盛況を論じるのは、主として唐以前と唐以後とを比較する場合であって、それは確かに新たな増加であって、それはとても高い伸び率を示している。前近代社会における種族相互の交流と文化的衝突の中で、これはまた、うちに近代的要素を最も多く蔵するケースでもある⁽²¹⁾。

筆者は、近代的な意味において、かつて「胡化」や「華化」を強調したのは同一の目的から出たもので、否定と肯定の両端から判断を下したものであると考える。学術的にいえば、唐代には胡人もいれば胡服も胡楽も胡食も存在したし、ある時期には「胡風」が盛んになり、「胡氣」も弥漫したであろうが、厳密な意味で「胡化」したことはかつてなかった。「胡化」とは当時の中国の知識人による、恐ろしい体験に対する一種の極度の想像や誇張であった。のちの人々がこの「胡化」という言葉を用いるときには、ある者は唐人らの旧意に従い、ある者はこれを「胡風」や「胡氣」の代替語として、唐代の対外交流の盛んなさまを誇るのに用いたのである。

三

外来文化が徐々に中国本土に溶け込んでいったことについては、すでに多くの学者の論述があり、ここではくわしく述べない。史実はまた、環境への流入に適しなかった外来文化はみな、中国の地に根を下ろして長期にわたり成長することができなかつたことを証明している。たとえば宗教では祆教〔ゾロアスター教〕、摩尼教であり、娯楽では滌寒胡戲〔訳者注：寒中に裸になり水をかけ合って踊る異民族の踊り〕などがそれにあたる。中国文化は各種の外来文化を包摂し併合するうちに、不断に強大となり、向かうところ敵なしとなつていった。

しかし、別の角度から見れば、外来文化はまた次第に中国の地に適応していく過程のなかで、不断にみずからを放棄し喪失していき、それは文化の融合性や統一性といった点からすれば、一つの勝利ではあるが、文化の多様性や多元性の保持という点からすれば、これはまた一つの失敗でもある。隋唐統治者の血統の来源の一つを構成する鮮卑族は、長期にわたる不断な「漢化」(訳者注：漢族化)や「華化」の過程において、最後にはみずからの言語や民族をすら失ってしまった⁽²²⁾。漢文化の伝播・影響という立場に立てば、これは大きな成果であろうが、多元的な文化や文化の多様性の保持という立場に立てば、民族が危機に瀕し、消失することは必ずしもよいことではない。よって我々は「華化」に対する諸々の高い評価を改めて考え、検証する必要があるのである。

四

向達氏は「李唐の起ること西陲自りし、事を周・隋に歴、唯に政制多く前代の旧を襲ふのみならず、一切の文物も亦た復た華と夷とを問はず、兼收・并蓄せり。第七世紀以降の長安、一国際的の都会爲るに幾乎く、各種人民、各種宗教、長安においてこれを得可からざるは無し。太宗が雄才大略、固より瑣微に囿はれず、而して波羅球〔訳者注：騎乗球技「ポロ」のこと。ペルシャに起源を持つ〕の唐代に盛行するや、太宗即ち亨りて力有り。開元・天寶の際、天下昇平、而して玄宗、声色犬馬を以て諸王を羈縻〔懐柔し自治を許す〕するの策と爲し、重んずるに蕃將を以てすること大いに盛んにして、異族の長安に入居する者多く、是において長安の胡化、盛んに一時を極む。此の種の胡化は大率ね西域風の好尚爲り：服飾、飲食、宮室、樂舞、繪画、竟事〔すべての事柄が〕紛泊たり」⁽²³⁾と述べる。向達氏は「胡化」という語を用いてはいるが、文脈から推せば、それが「胡風」の盛行を指していることは明らかである。総じて、このくだりは唐代、特に長安の国際化の程度についての極めて簡潔な概括となっている。こうした国際化は、おそらく多くの面で我々に啓示をもたらすだろう。すなわち、

一、寛容で開明的な文化政策。唐の初め、北方諸民族を平定したのち、宮中では記念式典が挙行されたが、突厥の可汗は舞を舞い、南蛮の酋長は詩を詠じたので、太上皇・李淵は喜んで「胡・越の一家たる、古へ自り未だ有らざるなり」⁽²⁴⁾と称えた。唐の太宗は自分が中原を平定しまた四夷を帰順させることができたことを総括して五つの理由を挙げたが、その第五条は「古へ

自り皆な中華を貴び、夷狄を賤しめども、朕は獨り之を愛すること^{いつ}の如し。故に其の種落皆な朕に依ること父母の如し」⁽²⁵⁾ というもので、本当に一視同仁な対応ができていたかどうかはなお議論の余地ありとしても、唐がその前後に比して寛容で開明的な対外政策を採用していたことは首肯しうる。唐の初め、朝廷は西域諸国に対しては「其の商賈の往来するを聴くや、辺民と市を交え^{まじ}」⁽²⁶⁾ させた。太和八年には唐の文宗が「其の嶺南、福建及び揚州の蕃客、宜しく觀察節度使に委せて常に存問〔慰問〕を加へしむべし。舶脚、收市、進奏を除くの外、其の往来流通し、自ら交易を辨ずるに任せ、重ねて率税を加うるを得ざれ」⁽²⁷⁾ との詔勅を下した。初唐から中晩唐にかけての対外貿易政策には長期に安定した方策が採られており、朝令暮改で従いがたいものではなかったことが見て取られる。フェアバンクとライシャワーはそれを「文化的に寛容な精神に満ちていた」⁽²⁸⁾ と称した。やや近代風に解釈した嫌いはあるものの、事実との距離はそう遠くなくろう。

二、相互に裨益し合う交流の成果。隋唐間の交流を語る者は、あるいはいわゆる「胡風」「胡化」に偏り、あるいは「華化」に偏するが、その実いずれも各々その一方に執するだけで、真の国際化、真の交流とは双方の互惠となるものはずである。「中国が西域と交流して以後、両方の文明が互いに光を投げかけ合った。中国が漢魏以降に各方面で西域の影響を受けたことは甚だ顕著であり、また西域諸国間でも華夏文物の余波にあずかる者があった」⁽²⁹⁾。隋唐以降もさらに発展し、「花門の將軍 胡歌を善くし／叶河の蕃王 漢語を能くす」（岑参「独孤漸と道別す 長句 兼ねて嚴八侍御に呈す」）という詩句にも見られるように、この二者の交流は不断に拡大かつ昇華してゆき、遂には交流史上最も輝かしい一章を記すことになった。「隋唐の対外交流は単方向の選択ではなく、ペルシャや東ローマ帝国などにもシルクロードを開通させようとの理想があった」し、外国人は対中貿易からはもとより、唐代の先進的な制度を学ぶことから益を蒙り、唐代の文化は外部との文化的接触のなかで極めて大きな補充と発展とを獲得した。よってこれは一種の「双方向の文化的恩恵」⁽³⁰⁾ であり、これはまた實際上、近代国家の交流における一般的な原則にも合致する、互惠的なウィン・ウィンの関係であった。一千年も前の中世期において、中国と周辺民族との交流がこうした智慧を具備し得ていたことは、まったくもって珍重に値するものだ。

三、理性的に抑制された宗教的態度。唐の三百年間において、武宗朝を除き、あらゆる宗教はほぼ容認され、その自由な伝播が許されていた。三つの夷教中の祆教、摩尼教がそののち消失したのは、漢民族の宗教受容の習慣に合わなかったためであり、宗教の迫害とは無関係であった。このことは一般の歴史家が認めうることである。我々のいわゆる理性的抑制にはなおいまひとつの含意がある。それは大宗教および同一宗教内における各教派間における関係は、唐代においては相互に抑制され容認されていて、いくつかの大宗教の間ではその伝播の過程において、大規模な衝突がほとんど発生しなかった。このうちにいかなる大きな智慧が含まれ、いかなる契約が結ばれていたかということは、実に現代人が深く考えかつ探求するに値するものである。

言い換えれば、いわゆる国際化とは「胡（夷）化」でもなければ「華（漢）化」でもなく、胡と漢、華と夷の間での調停であり、胡（夷）の適度な発展の空間があり、また華（漢）の主流が保たれてもいた。行き過ぎた「胡化」は本土の中国人らに、恐怖から生まれる強烈な反発や拒絶を引き起こさせ、行き過ぎた「華化」はまた外来文化が生存し発展する空間を狭めることになり、

国際化、世界性を空論たらしめてしまうであろう。「華化」の過程は異質な文化の本土文化への融合の過程であり、また消失・滅亡の過程でもある。文化の多様性保護という立場からみれば、これは大きな歴史的欠陥といわねばならない。

幸いにも、モンゴル族の元王朝と満族の清王朝という異民族統治を除けば、とりわけ唐代の文化は国際化という方法によって外来文化に適度な空間を与えたため、その偉大さを成就した。その他の漢族が統治した王朝にはこのような気概はなく、唐の足下にも及ばなかった。短い元代では主として軍事独裁制が布かれ、清代は早期の軍事独裁から後期の極端な「華化」へと変わり、両極端へと走った。ゆえにやはり隋唐とは比較すべくもない。ただ、唐朝が胡と漢、華と夷との間での適度な調停によりその偉大さを成就したことは、唐の統治者の李氏自身が胡と漢、華と夷との混血による融合であったのと関係があるのか否かということは、実に複雑な別個の問題であり、本稿の議論の範囲を大きく飛び越えてしまうだろう。

註

- (1) もと『深圳特区報』1998年8月24日号に掲載されたもの。のちに氏の著『唐韻胡音与外来文明』（中華書局2006年5月版）に収録され、2007年11月25日にはこのテーマで西安曲江文化大講堂にて講演された。
- (2) 『唐六典』卷四「尚書礼部・主客郎中」（中華書局点校本1992年版、第129-130頁）。
- (3) 梁啓超『中国史叙論』、『欽冰室合集・文集之六』（中華書局1989年版）所収。
- (4) Edward H. Schafer *The Golden Peaches of Samarkand, A study of T'ang Exotics*（呉玉貴訳『唐代的外来文明』、中国社会科学出版社、1995年版）。
- (5) John K. Fairbank, Edwin O. Reischauer *China: Tradition and Transformation*（陳仲丹等訳『中国：传统与变革』、江蘇人民出版社、1996年版）。
- (6) 『唐六典』卷四（中華書局点校本、第129-130頁）。
- (7) 『資治通鑑』卷一九八貞觀二十二年二月の条。
- (8) 『貞觀政要』卷九「安辺」第三十六。
- (9) 葛承雍『唐韻胡音与外来文明』第12頁。
- (10) 『資治通鑑』卷二百三十二（中華書局点校本第7493頁）。
- (11) 王建「涼州詞」。『全唐詩』卷二九八。
- (12) 元稹「法曲」。『全唐詩』卷四一九。
- (13) これは『新唐書』卷二四「車服志」にも見える。
- (14) 『旧唐書』卷三八「地理志」の諸州の戸籍統計数、および『旧唐書』卷九「玄宗紀」の統計を参照。統計結果は葛劍雄主編、凍国棟著『中国人口史（隋唐五代期）』（復旦大学出版社2002年版）第96頁、第97頁より引用。
- (15) 葛劍雄主編、凍国棟著『中国人口史（隋唐五代期）』第213頁の統計を引用。
- (16) 宋敏求『長安志』卷十“西京”の条による。
- (17) 『全唐詩』卷二零一。
- (18) 『韓昌黎集』卷二。
- (19) 『韓昌黎集』卷三七。
- (19) 『全唐詩』卷五七一。
- (20) 『全唐詩』卷五七一。
- (21) ある学者は2006年の統計数によって、世界の五つの有名な都市における外来人口（単位：万人）がその都市の人口全体に占める割合を比較している。すなわち、ロンドン（194、27%）、ニューヨーク（314、33.7%）、

パリ（108.2、17.6%）、東京（191、2.4%）、北京（7、0.43%）。ここから分かるのは、21世紀初頭の中国において国際化が最も進んだ北京市における外来人口の割合は極めて低く、西域化もしくは西洋化を恐れるような噂はかつて聞かれたことはない。そのほか、北京市の国際化は、他の世界の有名な都市に較べて甚だ遅れており、努力の余地はまだ大きく、本当の意味での国際化までには、任重く道遠し、といったところだ。白志剛「魅力あるロンドン」（『北京社会科学報』2009年10月19日第4版）参照。

- (22) 葛劍雄「蓋世英雄還是千古罪人：元（拓跋）宏及其遷都和漢化」（『讀書』1996年第5期）や同『統一与分裂：中国歴史的啓示』（三聯書店1994年版）に関連する論述が見える。
- (23) 向達『唐代長安与西域文明』（三聯書店1987年）第41頁。
- (24) 『資治通鑑』卷一九四貞觀七年、中華書局点校本第6104頁。
- (25) 『資治通鑑』卷一九八貞觀二十一年五月、中華書局点校本第6247頁。
- (26) 『資治通鑑』卷一九三貞觀四年十二月、中華書局点校本第6083頁。
- (27) 『全唐文』卷七五、唐文宗「太和八年疾愈德音」。
- (28) 『中国：伝統与変革』第112頁。
- (29) 向達『唐代長安与西域文明』第96頁。
- (30) 袁行霈等編『中華文明史』第三卷（北京大学出版社2006年版）第58-66頁。